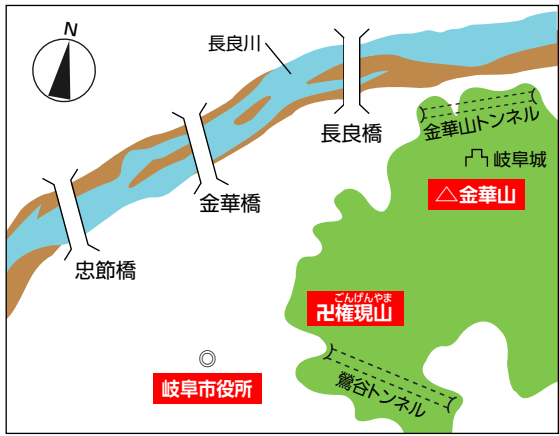


# 権現山の「時の鐘」

「時の鐘」の由来と、岐阜の人々の祈り

金華山西南の一角に権現山があります。この権現山にあるお堂では、毎日朝6時から夜10時まで、一時間ごとに鐘がつかれています。昔から、岐阜の町の人たちはこの鐘を「時の鐘」と呼んで、長い間親しんできました。

この鐘はいつ頃造られ、どのように守られてきたのでしょうか。



## 1. 幼き日の思い出

(昭和10年生まれのYさんの話)

昔から、朝に夕に毎時、ゴーンゴーンと余韻を残して、時を報せる鐘の音。

音が権現山から聞こえてきます。天気の良い日は特に澄んで大きく長く響きます。

子供の頃、私たちは、朝はこの鐘の音を聞いて隣同士誘い合って学校へ向かいましたし、家に帰って近所の通りで遊んでいても、夕方の「時の鐘」でみんな自分の家へ戻りました。朝起きて夜床に就くまで、三度の食事と同じように聞こえてくるのが当たり前前の鐘の音でした。

## 2. 「時の鐘」の由来

明治26年(1893)5月、権現山の麓で銭湯を経営されていた村瀬平作さんは、その前々年の明治24年(1891)の濃尾震災の大勢の犠牲者の霊を弔う手だてがないものかと思案されていました。その頃たま

たま文明開化の横浜に遊び、「野毛山・時の鐘」を聞かれました。岐阜の人びとが約束の時間に遅れても容認してしまう習慣も同時に頭をよぎり「岐阜に『時の鐘』を設置しよう」と考えられたということです。



権現山の鐘楼と鐘

それに加え、明治27年(1894)に起きた日清戦争で多くの戦死者が出たこともあり、村瀬さんは「お国のために亡くなった方々を慰霊し、併せて天災や戦争のない平和な世界を祈願しよう」と呼びかけを始められました。

実現には三百円が必要ということでしたが、当時の三百円というお金は途方もない金額で、志が何度も挫けそうになりました。しかし、「発起人・村瀬平作、世話人・小塩薫、賛成人・堀口有一以下二名、有志者・渡邊甚吉以下五二八個人、団体、会社等」の賛同を得て、ついに铸造されたのです。

よび付属建物一切を岐阜市に寄付され、「時の鐘」は岐阜市において管理することとなりました。  
昭和23年(1948)3月21日、堂守として藤下蓮誠さんが「時の鐘」を撞き始められました。そして20年後の昭和43年(1968)12月22日、藤下さんが高齢のため下山され、代わって田口好郎さんが堂守となりました。

## 3. 歴史博物館に見る「時の鐘」

当時の「時の鐘」は、岐阜市歴史博物館に保存・展示されています。鐘の正面には一段目に「天下和順」「日月清明」、二段目右に「風雨以時災厲不起」(災害が二度とおこりませんように)、二段目中央に「戦勝紀念鐘」二段目左に「国富民安兵戈無用」(国民が安心して暮らせるように、戦争はしないように)、三段目に「崇徳興仁」「軍人戦死者冥福」(務修禮讓)(軍人の戦死者の冥福を祈ります)と刻まれています。

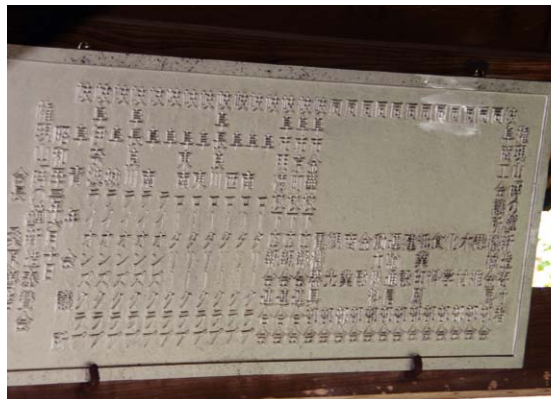


余白にはたくさんの方々の戦死者と思われる名前、：「岐阜市 富茂登村 谷留太郎、今泉村 瀬尾岩吉、土方久次郎、山県郡、武儀郡、本巣郡、羽島郡、安八郡、加茂郡も恵那郡もありました。そして益田郡、大野郡、吉城郡と続いて終わっています。：日清戦争で大事な命をなくした人たちは、岐阜県だけで238名にも及んだのです。

更にその下には「時の鐘」铸造のため寄付された人々の名が、そして一番下の鐘の縁には「南無阿弥陀仏」の文字がぎっしりと並び、鐘の後面には、「聖寿萬々歳」「明治廿七八年之役 岐阜懸 従軍忠死者」と刻まれています。

## 4. 二代目の新しい「鐘」

その後、鐘の音が悪くなったので



賛助団体を示す看板

## 5. 7月9日の「平和の鐘」

昭和20年(1945)7月9日は「岐阜空襲の日」。岐阜の街は瞬間に火の海となり、多くの建物が焼け863名もの市民が犠牲になりました。その悲劇を忘れず、市民一人一人に平和への思いを一層深めてもらおうと、平成2年(1990)より「平和の鐘事業」が始まりました。

毎年7月9日午前9時から正午までの間、岐阜市内の130箇所の寺院や教会などで一斉に「平和の鐘」が鳴らされます。その中心が「権現山・

明治29年(1896)11月2日「時の鐘」の撞き始め式が行われました。村瀬さんは一家を挙げて権現山に住居を移し、日常生活の不便と闘いつつ、「時の鐘」を撞く奉仕活動を始められました。

以来、二代目幾次郎さん、三代目国三郎さんの三代にわたる奉仕活動が続いたのです。  
その間、昭和9年(1934)から改築されていた「時鐘楼」が昭和14年(1939)11月に完成しました。これを契機に、岐阜市は百五十円を助成し、二代目村瀬幾次郎さんに年額五十円の手当を支給しました。

しかし、山上における村瀬家の生活は、いつも山道を上り下りしなければならぬというとても不便で苦しいものでした。その上、忘れることなく毎日毎日朝6時から午後10時まで1時間ごとに鐘をつかねなければならぬのです。家族で旅行に行くこともおんびりすることもできません。不便さと責任感の間で、悩みに揺れておられたことと思われまます。

昭和20年(1945)終戦と共に、三代目村瀬国三郎さんは、現実の厳しい経済生活と責任の苦痛に健康を損じられ、ついに昭和22年(1947)12月31日の鐘を最後に撞かれなくなりました。

その後、「時鐘保存会」が一般市民から寄付を募ったり、山麓に住宅を建てて村瀬家の遺族に贈るなどしました。また、村瀬家は時鐘楼お



平和の鐘を撞く人

時の鐘」なのです。  
今でも時を告げている鐘の音には、大勢の人々の悲しみや願い、そして祈りの気持ちが込められているのです。

この文書は、「権現山・時の鐘」由来記や「市制120年記念・岐阜市民のあゆみ」などをもとに、山本敏子と後藤征夫がまとめた。

岐阜市歴史博物館ボランティア

「お話・岐阜の歴史サークル」

代表 後藤 征夫

<http://book.geocities.jp/gifurekisi/kekisishop.htm>

TEL 058-231-6726